

品川哲彦へのリプライ

魚住洋一¹

品川哲彦は、「存在と仮象——魚住洋一の思索と文体」のなかで、三つの事柄を論じている。すなわち、(1)私の現象学的経験論および自己／他者論について、(2)哲学論文が「語り」であることについて、(3)和辻論を含む私の「国民」論について、である²。(1)、(3)とは異なり、(2)は「哲学論文はいかに書かれるべきか」という一般的な問題関心から論じられているため、まずこの問題を取り上げたのち、(1)および(3)に対してリプライを行ないたい。

1. 「語り」としての哲学？

品川は、「学術論文では〈私〉は消去される」と言う。——私は、論文のなかで主語として「われわれは」や「著者は」が用いられている慣例にずっと違和感を抱いており、主語として「私は」以外用いたことがない。「〈われわれ〉っていったい誰のことだよ？」と思うからであるし、語る者を匿名化するその遣り口に抵抗感を覚えるからでもある。品川もまた、その著書『正義と境を接するもの』や『倫理学の話』において、きわめて禁欲的ではあるが、「私は」を主語として用いていたはずである。

もちろん、品川が言おうとしたのは、そんなことではない。彼が言おうとしていたのは、一般に学術論文は、「私」の主観性を消去した客観的な観点に立って、何らかの理論的立場の正当性を、それ以外の立場を反駁することによって論証するものであるということだ。客観性と論理性が学術論文に求められている以上、論文の言葉は「演算」に近づくことになる、と品川は言う。

しかし、純粋な数学／論理学の「証明」を除けば、哲学論文は、厳密には論理的と言えない曖昧さをもった「日常言語」によって書かれる。論理的な論証技法のみに依拠して書かれた哲学論文というものは、私には想像しにくい。哲学論文もまた、「書く」ことの一つのありかたである以上、文学など他のジャンルの書きものと共通したところを有している

¹ 魚住洋一（うおずみ よういち）。京都市立芸術大学名誉教授、龍谷大学元教授。

² なお、品川が取り上げた私の論文の何篇かは、私のホームページに掲載されている。

<http://w3.kcua.ac.jp/~uozumi/papers.html>

はずだし、哲学論文においても、論理性とともに、文体、修辞、文飾、^{あや}比喩、韻律、リズム、^{プロット}筋立てなどもまた、「書きもの」の技法として重要なのではないか。——哲学／文学の境界設定がきわめて困難なことを示す事例は、たとえば、「魂の低劣な部分呼び覚まし育て、これを強力にすることによって理知的部分を滅ぼしてしまう」として、哲人王が統治する国家から詩人たちを追放すべきだとしたプラトンの対話篇そのものであろう。——彼の対話篇が、きわめて巧みな「文学的」、「演劇的」効果の成果であることを否定する者は居ないと思われる。しかし、古代にまで遡らなくても、たとえばニーチェという名が示すように、哲学／文学の境界設定は、近代においても今日考えられるほど定かなものではなかったのである。そもそも哲学／文学の境界設定そのものは、ウェーバーのいう諸科学の「専門化」(Spezialisierung)、および、その制度化としての大学の縦割りの再編という一九世紀ヨーロッパの学問状況に由来するのではないか。しかも、そうした状況がなおも続く今日においてさえ、サルトルやベンヤミンの諸著作など、哲学／文学の境界設定を疑わせる事例は、枚挙に暇がない。

ただ、品川が言おうとしたのは、こうしたことでもないはずだ。彼が言おうとしたのは、論文は通常「語らない」が、「語る」論文もある、ということなのだから。——しかも彼は、「演算」する論文よりもむしろ「語る」論文をポジティブに評価し、そしてそのことこそ、彼がこの報告で何よりも述べたいことだったはずなのだから。しかし、品川が「語る」というこの言葉に託したものは何だったのだろうか。

品川は、「語る」ということに関して、私が書いたものが、アンデルセンの「裸の王様」、ジュネの『女中たち』、サルトルの『出口なし』など、「虚構」の引用から始める場合が多いことを指摘している。それらの虚構の助けを借りて、私が読者をそのなかへと巻き込みたいところへ巻き込もうとするのだ、と彼は言う。品川が言いたいのは、私が虚構にすぎない「物語」の力を借りて、プラトンの言うところの「魂の低劣な部分呼び覚まし育てる」ことで、論を進めるということなのだろうか。——私自身、私が書くときそうした「言葉の詐術」に依存していないとは言い切ることはとてもできない。しかし、たとえばアルフレート・シュッツにしても、その論文「ドン・キホーテと現実の問題」のなかでは、セルバンテスの文学的想像力の力を借りることによってはじめて、私たちにとっての「現実」というものが、私たちが相互に取り結ぶコミュニケーションのか細い糸によってかろうじて成り立っているという破天荒な事柄を浮き彫りにすることができたのではなかったか。

悪戯を仕掛けるような回り道をしたのかもしれない。私は、今私が言ったようなことを

思って品川が発言したのではないことは、十分承知しているのだから。——品川が述べようとしたのは、既存の理論的立場の枠組みのもとで何らかの問題を解決するのは異なった問題の立て方、つまり、今まで自明と思われていた事柄をはじめ「謎」として明るみに引き出すような問題の立て方の場合、「書かれた事柄は書く作業を通して生み出される」のであるから、書く作業は「演算というより創造に近くなる」ということである。さらに彼は、「哲学が驚きタウマゼインである以上、ひょっとすると問題の解決、謎解きを示すよりも自明と思われていることを謎として示すことが重大ではないか」とも書いている。品川がいう「語る」営みとは、そうした「創造」に関わるものとして理解すべきなのだろう。品川が哲学に求めるのは、問題などなかったと思われていたところに問題を問題としてはじめて出現せしめるそうした創造的な営みなのである。

ちなみに、既存の枠組みによって「問題解決」を示そうとする哲学のありかたとは、いわばトーマス・クーンのいう「ノーマル・サイエンス」としての哲学のありかたであろう。「役に立つ」ものとしての哲学のこうしたありかたを、私もまた否定するものではない。しかし私としては、「語りとしての論文」あるいは「創作」という言葉で品川が述べようとしたことを、私が書いたものという事例を離れて、哲学一般の問題として考えてみたかどうかだけである。

2. 私への品川の批判について

次に、(1)、(3)の問題について、簡単にリプライしたい。

テキストを読み解く品川のすぐれた読解力につねづね私は敬意を払っており、彼が私の論文について指摘したことについておおむね異存はない。したがって、ここでのリプライは、二、三の補足的なものに留まる。

品川は、「魚住はサルトルとは逆に〔対自存在に対する〕対他存在の優位に傾いている」と述べ、「少年の頃に泥棒と呼ばれたのをきっかけにみずから泥棒となっていったジュネの話がしばしば引用されるが、他者による意味づけはそれほどまでに一回限りの宿命なものとは限らないはず」だと言う。私たちは「多様な場で他者によって意味づけられた〈私〉を演じるほかないとしても、そうした多様な場で異なる役割を演じる私は存在する」はずだからである。——たしかに、一般的な話としては品川の指摘する通りである。しかし、私が問題にしていたのは、「泥棒!」、「オカマ野郎!」、「この黒んぼニグロ!」、「アラブ野郎!」といった罵声を浴びせ掛けられる者たち、烙印スティグマを押されて共同体から締め出される者たち

だったのである。彼ら／彼女らは、サルトルのあの「カフェのボーイ」のように、軽やかに「カフェのボーイであらぬ」ことができるわけではない。私の関心が向けられていたのは、「対他存在の優位」を背負って生きねばならない者たちが現に居り、彼ら／彼女らがこの「宿命」とどう対峙しうるのか、ということだったのである。

犯罪を繰り返し何度も投獄されたジュネが、その犯罪を歌う詩人となり、彼を「泥棒」として排除してしまつたような人々が、その彼の詩の虜になってしまうという『聖ジュネ』のくだりについて、「いくら悪事を働いたところで叩き壊すことができなかつたまつたような人々の社会が、一片の小説が醸し出す毒にたちまち蝕まれてしまう」と私は書いた。それに対して、品川は、ジュネが受容されたのは「泥棒ジュネとしてではなく詩人ジュネとしてであつて」、「まつたような社会の〈正気〉は依然としてその〈正気〉という〈狂気〉から覚めずにいるのではないか」と述べる。——悪を歌い上げる「詩」もまた、「美」という社会的「価値」として、その毒を毒抜きされてしまう、ということだ。その通りだと私も思う。しかし、ジュネの作品は、まつたような人々の価値体系に、僅かではあつてもひび割れを生じさせたのではないか。さらにまた、たとえば一九四三年に出版された『花のノートルダム』などは、当時、差別や迫害のなかで身を潜めて生きねばならなかつたゲイやトランスジェンダーたちに読み継がれ、彼ら／彼女らをその屈辱的なありかたのなかで支える一助となったこともまた事実であろう。そうした人々が居るかぎり、ジュネが撒いた毒は密かに蔓延していくのではないだろうか。

また私は、近代の国民国家の成立過程で、「国民」というものが虚構として作り出されていったという話をした。品川は、「国民」というナショナルな意識を否定しようとするその話と旧植民地住民への戦後補償を求めようとする話とは互いに矛盾するのではないか、と言う。「日本国民という虚構は戦争責任の遂行のためにはむしろかえって必要だから」だというのである。しかし、私は旧植民地住民への戦後補償の話をしたのではなく、「定住外国人」にも市民権を認めよという話をしたのであつて、過去においても現在においてもこの国は「多民族国家」なのであるが、その事実を認め「定住外国人」に市民権を付与することが「〈日本国民〉という〈虚構のエスニシティ〉の脱構築に繋がる」のではないか、と結んだのである。

さらに品川は、和辻哲郎の「日本」についての「語り」が「騙り」に変じるさまを私が述べたことについて、「われわれがそこからさらに一步進んで、和辻の描き出す〈日本〉についての〈騙り〉に対抗しようとするならば、〈日本〉についての別種の〈語り〉を用意せ

ざるをえないのではないだろうか」と書き、「そこにこそ政治哲学と現象学との違いがあるように思われる」と続けている。——品川の言う通りであろう。今までの私の語り口の「限界」がここにあることを私は率直に認めたいと思う。現象学は、事実を事実としてあるがままに記述するものである。しかし、ことが「政治」に関わるとき、語らねばならないのは、品川が言うように、「かくある」事実ではなく「かくあるべき」規範であろう。だとすれば、ここは、たとえそれが「騙り」に変じようとも、和辻とは別の「語り」を語らねばならないという品川の言葉の正当さを認めなければなるまい。

何ごとかを言葉で書き記したいと思っていた私にとってきわめて大きな出来事の一つは、まだ学部生の頃読んだサルトル『聖ジュネ』から受けた衝撃だった。私は、そのテキストの随所に仕掛けられた「現実を仮象に変貌させる回転装置(*tourniquet*)」に魅了されたのである。今、私は、サルトルのジュネ論ではなく、ジャン・ジュネのテキストそのものを、『花のノートルダム』から『恋する虜』まで、あらためて読み返したいと思っている。

最後に、長年にわたり私の書いたものを読み続けてくれ、適切なコメントをそのつど与えてくれた品川哲彦への謝意を記しておきたい。